

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 和歌集における「羈旅」の部立と官僚たちの旅歌
 ——『万葉集』から『古今和歌集』へ——
 氏 名 劉 菁菁

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古代日本の和歌集における「羈旅」の部立の成立と変遷について考察したものである。「羈旅」という語は元々中国漢詩における一つの詩語であるが、『万葉集』においては、官僚の旅歌を束ねる題詞として用いられ、新しい意味と役割が付与されている。このような「羈旅」の用法は日本特有のものであり、編纂者の意図を反映したものである。これまで、『万葉集』のある一巻の羈旅歌群に限定した研究や『古今和歌集』の巻第九の「羈旅歌」を対象とした研究が多く見られるが、『万葉集』から八代集までを視野に入れて考察する研究は少ない。本論文は律令制度の実施に伴い、地方へ赴く官僚の旅が増えたという歴史的背景を踏まえ、『万葉集』から八代集までの羈旅歌の諸相と変遷過程を考察した。中国語の「羈旅」と比較しながら、古代日本の和歌集における「羈旅」の用法とその変遷過程を解明することで、和歌集の編纂者の編纂意識、分類意識と秩序観を明らかにすることが本論文の目的である。

本論文は序章、第一部、第二部、終章から構成されている。序章では先行研究の整理、本論文の方法、目的、諸概念の定義について述べた。第一部は、『万葉集』を中心に考察したものであり、第二部は、平安時代の漢詩集および勅撰和歌集を中心に考察したものである。

第一部は三章から成る。第一章では、和語「たび」と漢籍における「羈旅」という語の意味上のズレを明らかにした上で、『万葉集』の巻三における羈旅歌群の形成と巻三の編纂者が「羈旅」を題詞に用いた意図について論じた。和語「たび」は主に、旅中の苦渋によって生じた身体的な感覚を表すものであるのに対し、漢籍における「羈旅」は身体的な感覚というよりむしろ精神的なもので、常に孤独感、不遇意識といった感情が付随している。詠む人の個人的、主観的な認識と深く関わっている詩語であるため、「羈旅」は中国の漢詩集の部類名にはならなかった。一方で、和歌集における「羈旅」は、最初から臣下（官僚）の旅という政治的意味と数首の歌を束ねる部立の役割を持つ語になっている。巻三の雑歌に分類された柿本人麻呂羈旅歌と高市黒人羈旅歌は、それぞれ西へ行く旅と東へ行く旅で詠まれたものであり、大和から離れる官僚の旅歌を表している。『万葉集』の編纂者は、君主（天皇）と臣下（官僚）という二元的構造を作るために「羈旅」という語を借用し、

天皇の旅歌とは異なる官僚の旅歌を表そうとしたと考えられる。

第二章では、『万葉集』の巻七と巻十二の作者未詳の羈旅歌を考察した。巻七は、雑歌、譬喩歌、挽歌の三つの部立から成る。その中で、雑歌の部には「羈旅作歌九十首」が収録されており、挽歌の部には「羈旅歌一首」が収録されている。また「古今相聞往来歌」が収録されている巻十二には「羈旅発思歌五十三首」が入っている。本章では、この二巻の羈旅歌がそれぞれ異なる部立に属していることに注目し、「恋」「死」「旅」の三つの要素が混在する羈旅歌の意味と編纂者の分類意識について分析した。さらに、「旅」と「死」の要素を備える「行路死人歌」、「旅」と「恋」の要素を備える男女離別の歌を取り上げ、羈旅歌、挽歌、相聞歌の関係について考察した。巻七の「羈旅作」という題詞のもとに並べられた歌は叙景性が高く、土地讃美の表現を用いている。このような土地讃美の表現は「羈旅」という語に付随する感情的要素と相反しているため、「羈旅作」の「羈旅」は単なる「たび」の意味になったことが窺われる。また、巻七の「羈旅歌一首」は挽歌に収録されており、「行路死人歌」と同様に「死」と「旅」の要素が詠まれたものである。挽歌に属する羈旅歌と行路死人歌の存在は、羈旅歌と挽歌の緊密な関係性を示している。さらに、巻十二の「羈旅発思」は相聞に属し、その前に配列された「悲別歌」が「残された女の歌」であるのに対し、「旅に立つ男の歌」といった対称的關係をなす基準によって編纂された歌群である。「羈旅発思」と「悲別歌」の歌群は、旅が原因で別れる男女贈答歌のあり方を表すものである。巻七と巻十二の二巻における「恋」「死」「旅」の要素の混在は、人為的に作り上げた歌の分類と歌の実態の間に存在する齟齬があらわれたというべきである。この二巻の羈旅歌群の分析を通じて、『万葉集』の段階では羈旅歌を詠む作歌意識はまだ形成されておらず、旅歌の分類もまだ形成されていないことを指摘した。

第三章では、「家持の歌日記」と呼ばれる『万葉集』の末四巻（巻十七から巻二十の四巻）を取り上げ、末四巻における大伴家持と彼の周辺歌人が詠む「旅」と「別」の歌について考察した。特に、家持が越中の国守として任地に滞在していた時の歌に着目し、そこで詠まれた家持の遊覧歌、餞別歌、望郷の念を詠む歌を分析し、家持の創作意図について論じた。末四巻の冒頭には大伴旅人の僊従らの「悲傷羈旅」の歌群が配列されている。「悲傷羈旅」の「羈旅」は大伴旅人の昇進の旅を指すものではなく、僊従らの旅を指している。巻三に見られる君と臣の二元的構造がここでは長官と部下の二元的構造になっているところに、編纂者の意図が見える。また、家持と彼の周辺歌人が詠んだ「遊覧」の歌は二種類に分けられる。一つは長歌であり、家持が拓いた新しい文学の題材である。もう一つは任地で遊覧する際の短歌であり、家持が遊覧に同行した人と互いに詠みあったものである。この二種の遊覧歌は、「楽しく遊ぶ」という新しい文学形式を作り出し、旅歌の種類を増やした。さらに、餞別の宴や歓迎の宴で詠まれた歌は、男性官僚同士の贈答という文学形式を生み出し、官僚同士の連帯感を強める役割を果たしている。同時に、宴で長官と部下たちが歌を詠み合う形は、長官と部下という二元的構造を持ちながら、部下たちが長官を囲むという新たな関係を形作った。しかし宴という詠歌場面の影響が大きく、旅に立つ人の歌も人を見送る人の歌も、別れの悲しみによるものというよりは、むしろ宴が開催される季節や環境に関心が寄せられたものになっている。なお、家持が任地に滞在していた時に詠まれた他の旅歌には、望郷の念や不遇などの感情を詠んだものもある。これらの歌からは、天皇から離れてしまった官僚であるという家持の自己認識が読み取れる。このように、中国漢詩の主題である「遊覧」と「餞別」は家持によって和歌集に導入されたのである。このことは、勅撰三漢詩集の時代の遊覧詩と餞別詩の隆興、および「遊覧」と「餞別」の部立の成立の土台を作ったといえよう。

本論文の第二部も三章から成る。第一章では、勅撰三漢詩集、『新撰万葉集』、『大江千里集』など

の詩歌集の編纂を考察することによって、『古今和歌集』以前の作品における「旅」と「別」の部立の形成、および編纂者たちの「旅」と「別」を詠む作の取り扱い方を探った。特に『文華秀麗集』と『大江千里集』に焦点を当て、この二つの詩歌集の編纂が『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」の成立に与えた影響を明らかにした。勅撰三漢詩集における遊覧詩と餞別詩はほとんどが天皇主催の宴で詠まれたものであり、万葉末期の家持と彼の周辺歌人の作品に見られる応酬的な性格を継承している。『文華秀麗集』では「遊覧」と「餞別」の部が設けられるようになり、嵯峨天皇が主催した詩宴で詠まれたものが数多く収録されている。「遊覧」と「餞別」の部では嵯峨天皇の詩が冒頭に置かれ、天皇を尊ぶという勅撰的な性格、および臣下が天皇を囲むという円型の構造が示されている。また、『文華秀麗集』の遊覧詩と餞別詩は実詠が少なく、ほぼ嵯峨天皇と周辺の文人たちが中国漢詩の要素を積極的に取り入れて詠んだものである。したがって、君臣唱和の宴で詠まれた「旅愁」は詩を書くための要素であり、君と臣の関係を強化する役割を果たしている。それに対して『大江千里集』の「遊覧」の部には山水を詠んだ詩句が多く収録され、編纂者である千里の「遊覧」に対する認識——自然風景を鑑賞すること——が示されている。また『大江千里集』の「離別」の部では、千里は詩句の選択と配列によって人と別れる悲しみを詠むものが「離別」であることを示した。さらに、千里は白居易と元稹の離別詩から詩句を採ることによって、和歌の伝統にある男女の離別や万葉末期と平安初期に隆興した餞別とは異なる男同士の「離別」という類を作り出した。『文華秀麗集』と『大江千里集』における「別」と「旅」の部立は、旅を詠む詩と歌の種類、および表現を増やし、『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」の編纂に影響を与えた。

第二章では、『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」の部立の成立を考察し、古今撰者の「羈旅歌」を設ける選歌基準、編纂意識を明らかにした。『古今和歌集』では「離別歌」と「羈旅歌」は「人と別れてから旅に立つ」という時間軸上の前後関係によって前後に並べられており、それぞれ独立した歌巻になっている。『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」は多様な場面で詠まれた歌を収録している。『古今和歌集』の「羈旅歌」では、遣唐の旅の歌、流罪の旅の歌、任地へ赴任する歌、遊覧の歌、従駕の歌などが収録されており、羈旅歌の多様性が示されている。これらの歌は都へ帰りたいという願望を詠んだものを主とし、『万葉集』の家へ帰りたいという願望を詠んだものとは異なっている。「都から離れる旅中の歌」という基準で選歌されたものであると考えられる。また、『古今和歌集』の「羈旅歌」はほとんどが官僚の旅歌であり、万葉の羈旅歌が持つ階級性を継承したといえる。もっとも注目すべき点は、羈旅歌の中に、安倍仲麻呂や小野篁、在原業平、菅原道真などの中央政権から逸脱し、不遇意識を抱いている人々の歌が収録されていることである。この収録方針からは、古今撰者の、漢語「羈旅」が元来持つ意味に対する理解が窺える。しかし、この理解は後の時代の歌集には継承されなかった。

第三章では、『古今和歌集』以後の『新古今和歌集』までの勅撰和歌集における「羈旅」の部立を考察した。『後撰和歌集』では「羈旅」の部立において宇多院の歌が収録されたため、羈旅歌が官僚の旅歌を指すものではなくなった。また、『後拾遺和歌集』になると、「羈旅歌」の部では、参詣の旅の歌が新しい旅歌の種類として冒頭に置かれており、太上天皇、公卿、女性歌人、僧侶のような異なる身分の人の旅歌が収録されている。この収録方針からは、羈旅歌の範囲がさらに拡大する傾向が見られるのである。さらに、『千載和歌集』の「羈旅歌」の部には、題詠で詠まれた歌が多く収録されており、「羈旅」が実詠から題詠に転じたことが示唆されている。鎌倉初期に成立した『新古今和歌集』では、「羈旅歌」の巻頭と巻軸には昔の天皇と当時の天皇の旅歌が置かれる一方で、参詣の旅の歌、流罪にされた人の歌、僧侶の旅歌も収録されている。特に流罪にされた人の歌と僧侶の

旅歌が中国詩人の「羈旅」と接近した点は見落とせない。その接近した理由としては、平安末期、鎌倉初期の社会背景が中国六朝時代に近いことや仏教思想の影響が考えられる。この時期になってはじめて和歌集における羈旅歌に、歌人の孤独感や不遇意識などの内面的な感情が詠まれるようになった。また、奈良時代と平安初期の羈旅歌は官僚たちの旅歌が主流であったのに対し、平安末期から鎌倉初期にかけては、僧侶の旅歌が羈旅歌の主流となった。そのことから「羈旅」という語に付随する感情的な要素が、都から離れる悲しみから、世俗に背を向けたいという願望や生死の無常を嘆くことに変遷した過程が窺われる。

以上、二部における考察を通して、古代官僚の旅という視点から、和歌集における「羈旅」の部立の形成と変遷について論じた。「羈旅」という部立の形成は、律令制度の実施に伴って官僚の旅が増えたという時代背景と切り離して考えることはできない。各和歌集における「羈旅」の部立は編纂者が持つ秩序観を表しているものであり、当時の社会秩序を映し出す鏡ともなっている。本研究によって、奈良時代から平安末期までの和歌集の編纂者の秩序観がどのように変遷したのかを明らかにすることができた。